

姫たちの戦国

徳川秀忠の妻お江④

一龍斎貞花

講談師

誰をも魅了するであろう凛々しく成長した19歳の豊臣秀頼を見た家康は

「豊臣の旧臣は秀頼に従うことになろう、これはのんびりしてはおられんぞ」

徳川のため、秀忠のため豊臣を叩き潰さんと考えた家康、後継者へバトンタッチに強い姿勢です。

方広寺の鐘に記された「国家安康」「君臣豊楽」の、家康の名を安の字で分断し、豊臣家を君として楽しむの意味あり、徳川家を呪詛するものだと決めつけた。金地院崇伝の画策といわれ、秀頼が参勤交代するか、淀君を人質に出せと迫った。なんで受け入れられるものですか、大坂方戦いを覚悟。大阪城を取り囲んだ徳川方が天守に大砲をズドン、1発が淀君の居間に命中、数人のお女中が吹き飛ばされ城内は大混乱、秀頼が城を枕に戦うを主張するも、淀君は、和睦の使者に妹のお

初を立て、徳川方の使者家康の側室阿茶の局と2日間協議の末和睦成立。

本丸を除く主な建物を取りこわし、二の丸三の丸濠を埋めるという条件だったが、徳川方はすべての濠を埋め立てたので本丸は丸裸同然。

大坂落城、淀君、秀頼自刃

時なるかな元和元年5月7日、秀頼出陣を望むも押し止める淀君。秀頼が出陣していたならば、豊臣の旧臣は弓引くことならず、また淀君が真田幸村の進言を取入れていたならば展開が少しは違っていたかもしれない。「豊臣に嫁ぎました。一緒に死なせて下さい」とすすがる千姫は救い出され、お初も抜け、淀君と秀頼は燃え盛る炎の中で自刃。秀頼の側室が産んだ長男も8歳で処刑され、父と母を殺した憎むべき秀吉の側室となり、その豊臣を淀君が滅ぼしたとも申せましょう。天下の大勢が決するや、お福（春日局）の直訴もあって、家康が「竹千代に家督を継がせる」と言明。お江は慈しみ育てた国松でなく、乳母が育てた竹千代と決り正に呆然自失の有様。

徳川家のその後の存続をみる時、後継者選びの大切さがわかります。

その後お江は、家光に対し母として接していますが、家光は死後、父秀忠、母お江の眠る増上寺でなく、祖父家康と同じ日光に眠っていることでも、家光の両

親に対する気持ちがわかります。

秀忠は、お女中のお静に男の子を産ませたが、お江が恐ろしくかくし通し、武田信玄の4女で穴山梅雪未亡人見性院によって養育されていることを知るや、お江は柳眉を逆立てて秀忠に喰ってかかった。当時側室を何人も持つことは珍しくなかったが、お江は許さなかったのです。その子こそ三代家光を兄と慕い、補佐した名君保科正之でございませう。

家康は、お江の5女和子^{まきこ}を後水尾天皇に輿入れさせ、産んだ女一の宮が、女性で帝、明正天皇となりお江は天皇の祖母になったのです。

秀忠は、乱行を重ねる弟忠長を自害させ、家康さえ出来なかった福島正則をはじめ豊臣の旧臣、親藩譜代大名改易、キリシタンの禁止、海外貿易の禁止、人身売買、一季奉公、煙草作りの禁止など今と余り変らぬ政策を行うなど辣腕をふるい、將軍を家光に譲った後も大御所として実権を握り、徳川幕府の基礎固めを。きとお江の進言もあったのでしょう。女性として最高の従一位を贈られるなど3度目の政略結婚によってトップレディの座に君臨、結果妹の勝利。しかし姉2人に対しおごることなく、淀君が父長政の菩提を弔うために建てた京都養源院が焼失するや、再建し長政由縁^{ゆかり}の弁天様を祀り淀君と秀頼の菩提を弔い、お初に対し

でも贈り物をするなど姉思いのお江。

お江の死、豪華な葬儀

寛永3年9月15日54歳で波乱に富んだ生涯を閉じました。秀忠も6年後、6歳違いなので妻と同じ54歳で死去。

お江の葬儀は、10月18日沈香を32間^{けん}も積み重ねて茶毘に伏し、約180m⁴方檜をもって囲い、麻布の茶毘所から増上寺まで千間^{せん}の距離を竹で囲い菰を敷き、その上に白布10反を敷いた盛大な葬儀でした。増上寺に葬られ、その後秀忠も増上寺に別に葬られ、秀忠ヤレヤレとホッとしておりましたが、326年後、東京タワーを建てることになりお墓の移転、徳川家墓地は狭くなり、秀忠とお江夫婦は1つのお墓に合祀され、「エッ、今頃になってまた女房と一緒にかい」てんで、秀忠さぞかし驚いたことでしょうね。「あなたっ！」とお江は、今もかかあ天下でしょうか、いえいえきつと仲睦じく眠っていることでしょう。

TVでは、「やったァ」とか、信長の寝所へ1人で忍び入ったり、大事な場面に立合ったり立ち聞きしたり、ありえない戦国バラエティですが、事實は、側室を許さず夫を独占し、2男5女を産み、豊臣から徳川の天下となり、徳川政権基盤確立を支えたお江。戦乱を生き抜いた強き女性、秀忠の妻お江の一席。